



遠門  
號 990  
卷 1

本清

美月  
卷之二



大坂府公家三好家文白



出る油賣

ぬけくの

見る中後

崎流月











○賣油郎物語

一之卷

余戸の又二催婦女ハ

再縁のしとさ成は

二之卷

山崎の街に独住ハ

義父の家成さけ

三之卷

華洛の方ハ油賣男ハ

忠告のやと成たど

四之卷

西島の廓ハ出標の妓ハ

客人の体成さど

五之卷

狐川の邊に塾書役ハ

花魁の難成たど

賣油郎卷之一

浪速

芝屋芝叟 遺話

○一回 とくししたも

山背國邊のさちりよ。油屋余左衛門と云。油賣人あり。家  
 富小いあらねども。又化と謙だる分限もあらず。曾祖父  
 の代より。衛宅土庫に譲まうけ。生開は仕合より。油賣よ  
 する。尚ほ是易くらら一づらぐへつ。宿縁よや。其の  
 の齡ハ。知命よ余るまで。一又あらざる由え。神よ新王  
 佛よ誓へども。又よ其應護成んごま。びい。を。老  
 こと。是来ぬくふりひて。けよ。接本よ。花と。嘆せて。老



樂天入んと。遠方近方の知音を計りて。養育人なき  
 男を乞求つら。屬者往きうらぬ。一口といへる。ふも通  
 徳のすえある。聖となり。法蓮の南とゆへる。遠近の  
 村里より。老しぬく若れとかく。帰依の男女詣りし。  
 余九右衛門すて。一夜の佛縁と結び。法の后とも破すん  
 る。曹い過怪の更と。破流またのまんものとして。日毎  
 二条宿よりぬ。二説粵。同四八藩の卿士。南方十字を圍  
 める者。山林田畠多く。家大又富はまごも。ふもし。宗  
 嗣ぬりし。晩妻のほまたる男を養ひ。十太郎と文  
 名させて。恙しとる。往し。二男と役けて。又しや歎びよ

表びと重ね。幼名十次郎と名び。月夜ふも換て。はんす  
 の成長と樂し。十字を圍一時風のか地と。うらわて  
 う。熱身の痛く強く。熱氣の注来繁りれば。渾家ハくら  
 めり。兩個の男も病床の枕方を去やらず。く看病け  
 まごも。定業いのがまがとくやありけん。いつし。たま  
 了。當下い。毘十太郎ハ拾八茶。牙十次郎ハ拾五茶  
 のひより。毘十太郎ハ。原末篤。誠公。年性。こと。  
 義父が喪の中。孰大かりの。直らせ。副筆の。替法の中  
 える。杜鵬。い。れ。我。身。ま。ま。ご。嫡嗣と。定。ま。り。し。  
 か。ぬ。ら。ず。し。も。吾。儕。又。家。名。の。相。續。と。令。せ。ら。る。べ。し。







賣油



賣油即卷一





至系末産業の道は是はたる事と一もあらさるを  
近きそりり勢殿の芦のあつた江のまの荒まど菊と至て  
その日くの糧よあてたり。一日いつものごとく芦を蒔ては  
の川とをなごし。狐川と越て美津の市牧とある  
一口の方へり折しも。俄うは東風とげしくおとす  
豚の形あたる。狂や。只とふお日ひ一通りの雨降出さる。  
紐もてをを凌ぎて行経よ。雨ハいう。降まそうなるが  
途辺は石佛の地をみる。安置おせる。は堂の有くれど。  
早天よ水と除る。雪中よ炭とほたるのあかりし。て  
は堂よ憩ひて。雨の晴間と待居たる。境より。餘

左衛門の一口の道場より下向さし。は堂とゆる  
し。ぐ。木根や脈とるん。右の履の緒ふつと切て。道箱  
飛。傘おぬぐ。小孫ついてうつ伏たり。十太あや  
と走りけ。まとりて抱起し。裾の泥と拭ひつ。いとあ  
やうく。こを。いづこを。痛たまるま。かう。う。わたり。い。を。使  
侍。藁。菜。も。那。裡。よ。あ。ま。は。履。の。基。ま。い。ら。せ。ん。う。う。侍  
まうておはせ入りつ。いと。彼。は。堂。の。裏。よ。侍。ひ。履。引。を。き。い  
し。う。後。ろ。ひ。ま。し。て。を。ん。が。ま。よ。向。ろ。と。バ。余。左。衛。門。こ。を。う。ら  
いた。を。し。て。御。さ。し。入。備。し。も。今。日。ハ。さ。し。う。ら。誰。よ。う。い  
たり。し。よ。を。ら。ず。も。大。相。公。の。所。よ。と。は。せ。し。奉。返。す



かへとも罪得べく。往昔の張良の義とも認めんたは不  
美石公の背なまげしとてそ承はも。原元ハ名も取こ  
野夫まると。初まで勞倦介めしきるの。後生おるよ  
奇持おる。嫁ももあらざるけ容辨。こまをまの法  
生取ひし。て。宝刹道場。又請どる。小子よ。い。ま。う。地に  
持てたる善根。さるべし。過活よ。竹とを。ま。う。う。う。い  
知らねども。こまを。縁の緒。とて。小。又。方。へ。も。ま。ら。ま。よ。  
後。の。こ。ま。を。他。坊。余。た。借。つ。と。尋。ね。ら。ま。ま。ま。お。ら。ま。よ。  
人も稀あらんといと誠やう。又語をり。こまや橋。梓。れ  
始と。後。ま。ま。か。り。い。あ。う。う。ぬ。

○二回いまいしをたし

當下十太舟。い。つ。う。う。ふ。も。小。止。り。れ。ども。早。夕。書。の。以  
日。の。ま。ま。り。り。う。バ。友。の。狂。も。た。ど。し。し。か。る。べ。し。老人の  
家居。ま。ま。送。り。ま。い。ら。せ。ん。と。て。いと。懸。お。る。公。根。元。余  
た。藩。門。盛。ん。ど。り。も。石。の。境。前。ご。と。も。寒。異。と。う。へ  
ら。ひ。ま。ご。せ。し。う。う。に。十。太。舟。南。方。氏。と。名。ま。り。ま。ま。し  
有。枝。有。ま。ま。と。か。ら。る。その。鳥。美。お。る。後。生。と。り。流。浪。と  
せん。幸。成。情。も。原。来。骨。血。も。い。や。う。う。ら。ね。ば。余。た。借。つ。が  
義。ま。と。せ。ん。と。お。り。ひ。を。ま。ま。取。ま。も。商。量。し。て。一。日。け。事。と  
い。ひ。出。し。ふ。十。太。舟。も。用。く。の。糧。之。し。ま。ま。ま。ま。と。承



引文名一て。余を清と号び。まやう小家業成管まこ  
去うも兩親は仕えて。孝なすし。余左衛門四偶もまこ  
肉多のふれどくあはまこなり。美や務教べば。樓  
たてろといへる。左言のどく。は家二十某の比より。致はし  
て。今や傳介として。番頭。由に不てまの。おろ者あり。其性  
毎巧くくして。主人の假。びるまに。年足は金限を  
かまの。口先は又偽言とわごり。合は飽と身小強。依水  
おろ中書。清ありい。星條。撞本街の。残妓は。振うつ。  
を。執者まら。余を清と義。まの。商量とす。て。公。裏ま  
怒ると。合。我。勿。養。うり。回。功。ま。か。ま。ら。ん。比。撰。ま。に

余べーと。おりのまの。あらしし。小。さ。は。取。く。て。余。を。清。成  
過。短。と。お。し。た。る。と。ま。眼。と。一。何。う。な。か。ま。小。あ。や。ま。ら  
と。せ。ん。と。巧。ま。ら。ど。ろ。と。た。げ。又。中。老。陰。ハ。歳。の。ご。と。く。  
その。年。も。く。ま。て。新。ら。一。春。成。遠。へ。一。比。睦。月。ハ。余。を  
清。成。過。短。と。お。し。て。ま。ま。と。く。死。ま。も。愛。由。く。小。ご。短  
小。よ。ろ。こ。び。と。重。ね。る。が。満。ま。バ。か。く。る。世。の。お。ら。ひ。一。て。  
余。左。衛。門。ガ。陣。家。お。る。もの。不。平。凡。の。心。地。を。あ。ら。し。  
如。月。の。半。佛。入。滅。の。日。は。同。じ。く。し。て。と。も。小。涅。槃。の。雲。に  
お。く。ま。ぬ。余。を。清。つ。と。ま。余。を。清。が。ま。げ。ま。ま。と。お。ら。ぬ  
ご。も。か。へ。る。だ。と。通。ふ。あ。ら。ず。と。野。辺。の。後。く



とぬし。のらぬ事まで。ぬんごろよ。言えり。そまじき。法  
ハ。合家小女の。うづの。あらどま。蒸飯使女。し服とり  
て。出り。万の事なふく。と。不自由。がら。ふして。せう。こ  
僱婦。ぬし。とした。つて。と。ど。波澄。と。せ人。と。こ。人。と  
もと。り。ぐ。伏水の。納屋町。廻の。みる。べう。暖。暖。とい。つ  
婦女。奴。憑。て。ふ。く。は。と。ん。の。艱。ハ。と。こ。し。う。ら。し。れ。と  
と。ど。も。風俗。い。や。し。う。ら。ず。年。ハ。三。十。一。二。と。又。え。て。面。を。し  
向。く。ど。こ。や。ら。小。籠。ま。こ。ぼ。ま。て。聖。教。を。と。女。の。な。り。う。り。た。  
い。う。ぬ。し。者。ど。と。と。ぐ。り。す。ふ。奈。良。の。本。け。の。花。街。を。も。花  
所。とい。ひ。し。遊。君。の。身。の。り。と。伏。水。の。後。の。表。と。い。へ。る

者。と。終。の。約。な。し。烟。花。の。年。も。あ。ま。し。く。の。扇。の  
名。と。暖。暖。と。あ。ら。た。り。て。涼。茶。の。わ。り。小。籠。ま。る。が。相  
な。夕。ま。の。け。う。り。の。代。の。と。ぼ。し。と。ふ。女。夫。の。中。も。あ。し  
から。で。い。つ。し。う。休。書。ふ。と。よ。し。と。ぬ。し。の。暖。暖。女。の  
彼。よ。見。よ。と。沈。吟。五。本。お。け。ま。が。雇。婦。と。あり。て。伏  
あ。の。家。こ。と。と。た。ら。ひ。ろ。ろ。原。本。お。の。名。お。ふ。は。と。が  
お。く。と。か。く。ふ。人。の。う。へ。の。よ。れ。と。も。あ。し。と。ま。ふ。い。ひ。ふ。す。わ  
へ。各。家。よ。一。旬。と。い。居。ざ。り。たり。あ。る。ふ。日。油。坊。の。雇  
ハ。ま。来。て。合。家。も。疎。ま。ま。ず。近。隣。も。ま。ま。あ。り。ぬ。る。老  
こ。そ。や。さ。う。く。も。美。八。年。月。の。艱。難。骨。ふ。ま。ま。と。づ。ら。ら





南方十字三番  
 男十二市  
 油屋  
 参子と  
 百

南方十字三番  
 男十二市



んとせめて勤ると云ふことなり。一時東左余左坊の坊長方の振舞よりして大酒より家より回まれば、精癖のま枕にゆるのよをぬもて来つるかの暖帳と憑きて、櫻間をうとせぐるが、顔上は雪はけもまども、心の荒はたせず。酒臭のあまりどまどむよ。暖帳もいなぬのよる。だまぬまをまば、強くもいままで。そのまふ、東左の心ふあとかひたる。詰且、余左坊の酒をとりて、後悔はし。よしおと事成まらうと。我々の老は恥てのらふつふその念をまぐめん。我をといまし、うらまも暖帳の中くよ、華表こしたる。老妓の果なまば、そのまに

ハ許さず。深よとむ。虫の我々。王人の国は行々。老まハ余ま、爾成をり、合家を恥て。とまらぐと。おいへども。さらぬ承引ず、おらよりお毎にまひ。阿漕が浦よりひく。細のたへま、おれず。合家の者もかほけど。余ま、濁ハたご、おらず。おほよてさぬ。信助の。おのま、過強とわらざる。おらより眼よ。暖帳は對てハ。佞言、おらといへども。主人お向ひてハ、おらも。その。目と。おらといへども。おらより。おらて物換里よりつらぬ。まどぐい、いつともする。世間も識て。そのまも恥ず。ま。地の戸籍とあらとらうへて。暖帳ハけ家の継室と



ありくまば余を謝も母のごくうやまひ。合家の者も。  
 至人の下く思う申ふ。余九尾門ハ。次第は老くづか  
 き。眼疾とけらひて。ほめ又内瘡の症とまをば。家  
 事ハもま。母婦人まうせとありて。油坊の竈お軍と  
 ぞいひうらうら。とべて女の眞正よりて。おのどく節  
 義とまとぞ。梅のどく酸味と換ざる。いんまうと希  
 ありしもの。移り易くあ性多し。東及余左衛門つハ  
 老の浪もく。皺紋おとことうたうへ。双眼ひうら  
 矢又へば。閨房のかからひうとくしくありて。暖湯ハ  
 たのしまず。け以日ハ余を謝が。表やうありよんをよ

せて。透間あらば身と任せんと。おまよりく。老教  
 ふ不しうまごも。天性まへ美余を清まをば。とむり  
 よからぬ志しといふりいやうけず。以子あはとまれか  
 今と母と習る暖湯まをば。竹角又つけてうやまひ  
 たりくまをば。端婦ハをつとむらうら。表して。ある  
 又かひいこうも。いろく。眼とよせうら。言ハ余を清  
 しそのまを。暖湯。けわく。志と事よありて。か  
 ござるていよむて。おしぬ。そも義父け端婦といどした  
 る事と。余を清やうら。小ありうら。後ハ。我園と様よ  
 うつり。表ぬ。暖湯ハとかく。余を清が。あうど。表



いとくかめくうも。今うかしのゆる瀬なまきう。小く  
洗けよいとんもの。ある寂老まのうまう。餘入る  
肴とどろ。圍とぬけ出ておとく。おのり燈の灯と吹  
けし。まのび。まして。樓の梯又と登る。常よいころ  
おと。浪言も。魚の採とよま。ざうしと音。う。小。拍  
とろと。拍。縁て。合。家。成り。おひ。年。一。て。這  
あ。ぐ。う。や。う。し。小。余。を。情。が。控。方。よ。ま。び。し。る。余。を。測。ハ  
と。ま。う。りの。お。ま。成。り。う。う。て。む。く。と。籠。帯。ひ。き。し。ら  
て。と。う。う。て。何。し。の。ぬ。ろ。ど。と。登。じ。ろ。と。ど。め。て。妻。ハ  
お。り。と。低。り。て。う。う。う。ハ。圍。り。と。ろ。と。籠。の。梅。香。の。う。

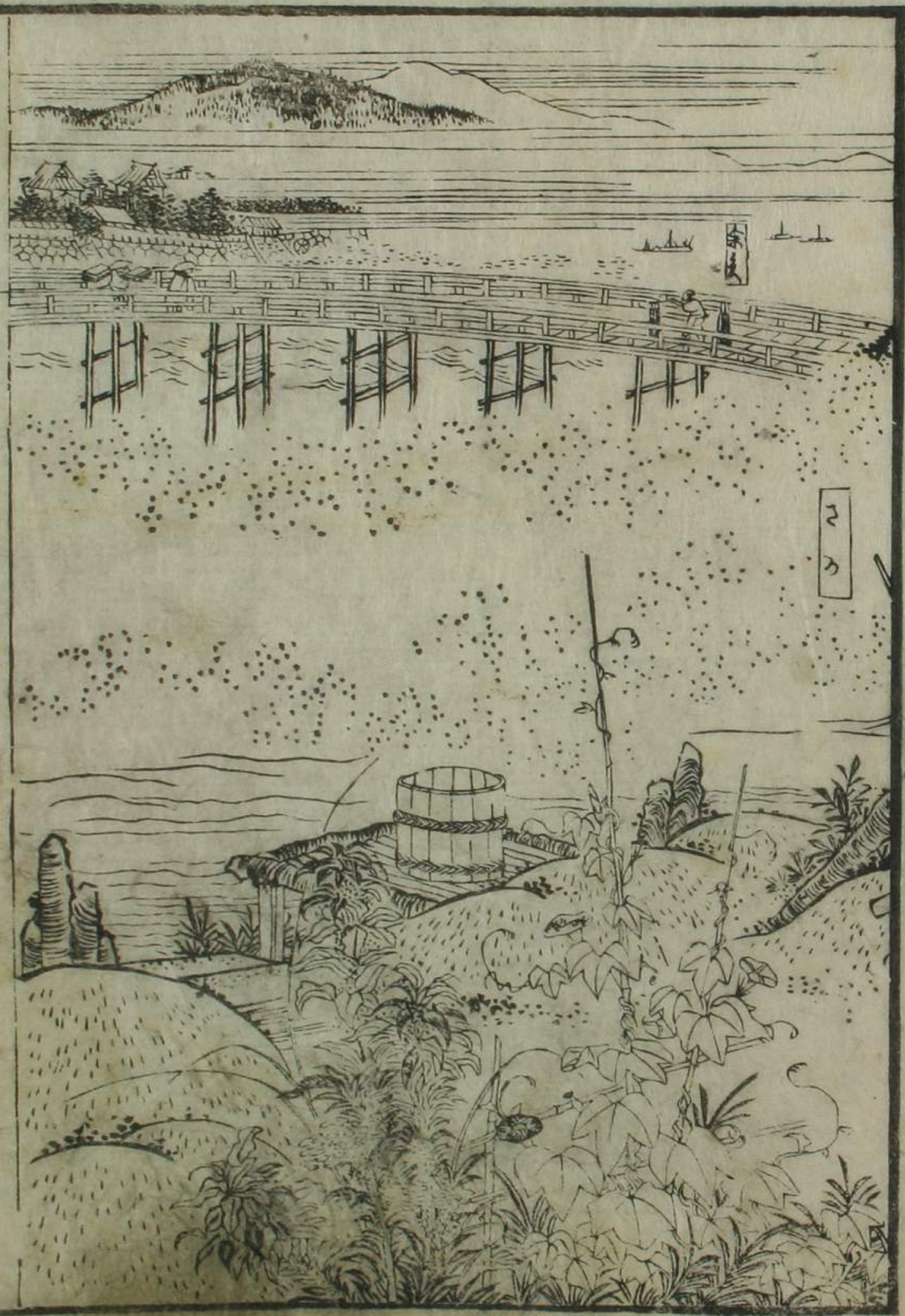
小子やうよ。いやらしくも。香とたし。我身のこと  
ら。か。り。又。ぬ。邪。念。と。ハ。悟。ま。ど。も。更。又。か。つ。う。ぬ。体。に。も  
て。お。し。竹。事。う。ハ。記。す。ぞ。や。お。陰。の。光。来。ま。つ。う。ハ  
し。と。い。い。ば。暖。暖。の。う。ち。後。て。お。も。く。所。身。の。か。つ。よ  
た。入。なる。ぞ。や。お。事。ま。ら。や。う。なる。か。よ。ま。づ。と。て。お  
ふ。よ。そ。へ。事。ふ。よ。せ。て。幾。度。う。情。を。傳。え。ぬ。る。よ。身  
苑。か。あ。ま。ど。も。流。水。ま。ま。く。や。く。ぬ。ん。と。ま。ま。ど。い。と  
尚。お。ま。の。彌。ま。ま。や。ら。ず。息。暮。の。後。氷。條。と。な。う。て。い  
つ。う。ぬ。ま。ん。ぬ。お。ひ。今。う。う。と。あ。く。う。ま。ま。ふ。ひ。く。と  
かん。と。女。の。身。の。あ。う。ま。ま。ど。き。月。類。と。ぬ。び。て。ま。の。び



来まらふ。何事このハとハ曲もふとと。歩眼もく  
くどくうちも。余も湯ハ義父の耳もや入ん。合家  
の者の眼や見えんと。身も熱候の汗とわきまに  
湯水の掻と冷してふと膝とあそぶ。備しも思ひ  
よらざるおぼしむ。けふもとりての。幾許うあうがく  
へ行くも。よくおとあはしとけたまはるべし。義父の  
髪髪一うしの文もまを。我たのみの母取らざる。志て  
う人及ふ背とたる。畜生界のことごとくまぬるべとや。  
義父の眼もまばらたがひとあいらん。幸也べし。  
いやとくし。あつせたまくと。何とぞして程とあ

けまばと。もの姫婦もかたはら。か。ハ。面伏も思ひ  
く。お。し。も。近。と。迎。の。道。場。も。晨。勃。の。大。鞆。ぬ。り  
後。り。ぐ。ま。ば。合。家。の。者。記。出。ん。と。か。あ。ハ。て。暖。味。ハ。こ  
の。ま。い。樓。と。お。し。く。る。か。ま。と。は。癢。る。も。の。あ。ま。ば。こ  
小。拾。い。も。の。あ。る。が。世。の。中。の。ま。系。よ。し。番。匠。の。傳。介  
ハ。余。を。衛。と。あ。ま。り。も。増。む。と。い。へ。ども。京。来。貞。ま。よ。し  
て。行。の。美。作。も。ぬ。く。諸。君。も。い。へ。と。膝。も。あ。し。と。ま。ば。こ  
ま。い。と。ま。と。ぬ。や。ま。い。る。が。け。傳。介。の。性。温。念。源  
して。暖。味。女。が。け。家。も。来。ま。る。け。し。う。代。が。あ。ぶ。と。け  
ぬ。け。た。る。と。眼。は。つ。け。ども。眼。の。あ。ら。ハ。ぬ。る。が。か。よ。あ。す





三三



修助

修助と  
 通  
 局



やあまさん。己のづしふるせしうら。主人余左衛門の  
不務とるりぬ。もべて流俗なるものハ、あけくまこそ  
くまたる。冥女とゆんとのそんは、懸想して思ひと  
遠ざ偶とまでもまき女のたれよ。そを身と失ふもつ  
れう。東尼の次第は老くづとま。暖味の日は、ぼして  
壯んふまば、暖味あるべしとふりひそめて。頃日ハ  
まきりまかうごきていどまんをとまども。まきぬえ  
んよたらど。但せざるよ。春まの因果よ  
して。暖味ハ傳介ふつまなく。余を周よかかんと馳  
る。佐坊の合家ハ懸想まことに。三ツ輛繪のごとし。

余を周ハ。お暖味よくとお訓せしことゆへも  
ちや嗜うつらんとふりひの介。流俗ハなともいや坊に  
事よあつてハ、かところ人まをたよハ、恨もねどとらじざ  
くま。自然義父の心づきたまひ。年のどくおりと。  
千万の思ふとそし。ふりひとらへ。我宿と避ける  
ふハ志のっどと。是よりして出高ひととどめ。店ハ賣  
差まらりハ。傳介と官家よて奉とまば。そ身ハ介  
小出で。偏く愛く瓜をまべしと。義父よ若て。はねよ  
他擔と挑ひ。あしたよハ星がいたねて出り。中入を  
ふハ月が背てあつらり。去るてもつらき小橋るハ。



長暮のまらハせして。暖帳ハとかくも。余を測と取  
 びくんと。かぞくしのおりいハ人志らぬ火の燃うつら  
 こ。ふくびあし孫るとり。世満の時と計りて。樓の  
 内へ志のびり。余を測ハ眼をて。あおどろを。くいに  
 遠せども。は。婦人。又も。あるさ。い。ま。り。れ。ば。大。い。に。こ。す。く  
 果けよハ。言として。彼とたらし。は。場とまぬ。う。ま  
 んと。心と。定め。と。あら。ば。是。氷。ま。し。い。う。ふ。も。ぬ。ろ。ろ。に  
 志たがひ。ア。べ。し。ま。う。一。恩。義。ある。父。の。眼。と。ぬ。を。ひ。こ  
 と。の。り。ご。し。が。と。ろ。ま。ば。た。ぐ。今。看。の。と。ま。し。ち。ら。し。た。ま  
 し。ま。と。い。ひ。くれ。ば。暖。帳。承。引。ず。ま。ま。中。一。枚。の。巻。う。

ぬらび。お。り。い。を。り。ご。ろ。志。ら。糸。の。む。う。し。を。ま。し。ぬ。ら。ぬ。  
 を。め。い。し。い。ハ。湯。ぬ。先。の。用。於。ま。ま。玉。椿。の。八。千。代。は。  
 かけて。又。よ。こ。ま。ま。ド。など。厚。皮。よ。も。塩。摺。ご。ゆ。く。志。こ  
 たる。ま。か。こ。ら。事。ふ。ま。と。ハ。た。ぐ。ま。教。よ。て。い。と。し。つ。一。枚  
 して。ち。ろ。さ。せ。た。ま。へ。と。つ。う。ま。暖。帳。お。り。い。や。う。系。来。撫  
 よ。ハ。こ。男。ま。ま。ば。後。の。事。と。固。く。つ。う。ま。う。り。て。か。く。億。す  
 ろ。と。お。ば。あ。い。う。ん。し。て。ぬ。り。も。梳。ど。ぬ。か。ハ。さ。バ。や。ハ。ら  
 其。ま。ふ。の。う。と。べ。ま。ハ。と。お。り。い。を。ハ。り。て。西。て。ハ。入  
 たり。体。ま。し。て。ぬ。し。は。と。ハ。ら。か。ら。ま。し。今。宵。一。枚。を。か  
 ざ。う。ま。し。お。り。い。を。ま。ら。べ。し。と。ら。ば。天。明。は。後。ら。ぬ。し。



日比のおりいと。晴とせたまへと。かいらちてより。流は。  
やと。まば。待たまへ。用足たらんと。やうく。  
あごひと。おせ。余を。湯ハ。幸じて。樓の。が。お。と。  
脊戸は。出るに。まご。あふ。け。を。ど。その。ま。と。と。  
草履。し。ら。と。と。て。擔。た。と。つ。もの。と。と。出。  
々。番。の。傳。ハ。前。日。伏。水。の。同。屋。に。用。あ。了。  
半。後。漢。と。出。て。か。つ。り。小。川。の。裏。深。に。ま。り。酒。  
ふ。け。り。て。漸。亥。の。刻。斗。に。家。に。戻。り。を。う。ら。と。  
前。尾。あ。う。く。ひ。そ。う。又。床。と。こ。ら。ん。と。と。る。こ。ろ。暖。帳。  
女。ご。こ。り。笑。し。て。樓。へ。行。と。又。し。ら。あ。ハ。余。を。湯。と。

み。そ。う。幸。成。ま。し。は。る。よ。と。ん。づ。き。お。の。き。ふ。は。は。  
お。く。ま。し。ら。も。明。る。幸。の。有。由。へ。な。い。ん。う。う。  
け。一。條。と。も。て。余。を。湯。に。送。り。お。ひ。日。こ。る。れ。う。  
ら。も。無。路。の。仇。一。時。よ。と。ら。さ。バ。我。幸。お。は。ま。と。も。  
う。美。言。成。た。と。ん。と。息。を。け。り。て。う。ひ。居。る。暖。帳。に。  
か。く。と。も。を。あ。ま。し。ず。今。や。あ。る。う。と。ま。て。ど。も。く。お。  
た。ら。さ。ま。バ。お。ハ。あ。ご。ひ。う。ま。し。り。と。初。て。か。つ。き。牙。と。  
歯。で。う。ち。抜。ご。ち。余。を。湯。と。と。ら。へ。か。り。ふ。と。ま。眠。ん。と。  
樓。と。お。り。て。た。づ。ぬ。ま。ど。も。其。母。の。死。え。と。ま。ま。い。ま。ち。  
ん。の。や。ろ。う。と。お。く。脊。戸。に。た。づ。む。て。と。や。せ。ん。か。く。や。と。



おりのとりとねぐる。傳介は始終とくとえしをけ余  
ま湯よ。不義のあらざる事か知るうりたらまらに  
舌なめどりして。脊戸はにうひ出。後さま抱付に  
暖味いふどろと。ふり不どとて。おとえま。日ひい  
とらへる。傳介おま。度くのらうせ。こらしめ  
声まんとまらうし。バ。傳介あはて。おかを合せお  
くらぬ。暖味い見よう。ふと不使のん。おくり。さてしも  
をま。おりのいと。余ま湯のほま。まおひ引  
かへて。傳介が。おどりのま。はらし。とよと。たらまらに  
か。とまて。背戸の。ま。この。下。加。に。お。枕。の。紐。をかた

しき通ぬらぬ。妹脊の山よとけ入る。悪縁をう  
てま。

海  
の  
し  
ら  
る

傳  
介

貴油郎 巻一

貴油郎



